

世界に誇る パウダー・スノー という「商品」

冬、厳しい寒さや雪に閉ざされる北海道人にとって最大の娯楽はスキーだった。小学校の校庭や公園には小さい山があり、子どもたちは毎日そこでスキーを滑る。ゲレンデの整備が進んでいない頃から、スキー愛好者はシールと呼ばれるアザラシの皮をスキー板の裏側に張り、山を登り、新雪を豪快に滑り降りたという。

北海道とスキーの関わりは古く、その始まりは定かではないが、オーストリアの軍人テオドール・フォン・レルヒ少佐が新潟でスキー術を伝えた(日本のスキー発祥と言われている)翌年の1912(明治45)年、次の赴任地となった旭川第七師団でスキーの講習を行って以来、本格的に広まったとされる。翌1913(大正2)年、ニセコ地域においても、レルヒ中佐(北海道への赴任途中で昇格)から手ほどきを受けた人たちによって住民たちにスキー技術が伝えられた。ニセコヒラフスキー場入口のレルヒ記念公園で一本杖を持ちスキーを履いたレルヒ中佐の像が私たちを迎える。

大正時代からは、北大スキー部や小樽高商(現小樽商大)スキー部が相次いでニセコ地域で毎年合宿を行うようになった。今も当時の練習場が「北大スロープ」「高商スロープ」の名で残っている。これらの人々により、地域の住民の間にスキー熱が高まっていった。

北海道の各地にスキー場が整備され、多くのス

キーヤーが訪れる。その一つ、ニセコ連峰は蝦夷富士と呼ばれる羊蹄山の西側にあり、主峰の標高1308・2mのアンヌプリを中心にイワオヌプリ、チセヌプリなどの山々が連なり、ヒラフ、東山などの数多くの大規模なゲレンデが切り開かれている。

スキーのメッカ「ニセコ」の名を広める契機となったのが、昭和初期スイスのサンモリッツで開催された第2回冬期オリンピックで、この大会に日本は初参加した。ちょうどその時期、「スキーの宮様」として親しまれた秩父宮様が視察とスキー練習を兼ねてこのニセコ地域を訪問、当時の新聞には「極東のサンモリッツ」の語が紙面にのり、後に「東洋のサンモリッツ」としてニセコ地域の名が国内外に広まっていくこととなった。

1964(昭和39)年には倶知安町とサンモリッツ市は姉妹都市の提携を結び、2004(平成16)年には姉妹都市提携40周年を迎えた。両地域はスキーインストラクターの受け入れや、音楽や食文化など、幅広い交流を行っている。

ニセコ地域のスキー場の最大の特徴はその素晴らしい雪質である。北海道の中でも豪雪地帯として知られ、日本海からの北西の季節風がニセコ周辺の山々に吹きつけ、多い年には2mを超える積雪となる。そのうえ、寒気は非常に強く、これがとくに乾いてさらさらとした(しばしば「砂糖の